

韓国人日本語学習者の役割語の習得 一文末形式と方言に注目して

鄭 惠先 (長崎外国語大学)

jung@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp

1. はじめに

「わしがやるぞ」と「あたしがするわ」では、連想する人物がまったく異なる。このように、特定の人物像とともに刷り込まれている言葉づかいを、金水 (2003) は「役割語」と定義している。役割語についての知識は特別な教育によるものではなく、普通の日本語母語話者として日本で暮らしていくだけで身に付くものだとされている。それなら、日本語を第二言語とする在日日本語学習者は日本語の役割語についての知識をどのように習得しているのだろうか。そのプロセスと知識レベルを探るための第一段階として、本研究では、韓国人日本語学習者に意識調査を行い、その内容を分析した。

調査は「文末形式」と「方言」という二つの項目に焦点を当てて行われた。その結果、日本語能力が高く、日本滞在歴も長い上級レベルの学習者であっても、役割語についての知識は母語話者に比べるとかなり低いということがわかった。さらに、役割語理解のための学習者独自のストラテジーが働いている可能性もうかがえた。

以下、2回に分けて実施されたお互い異なる内容の意識調査の結果をもとに、韓国人日本語学習者の日本語役割語習得の過程で見られるいくつかの特徴について述べる。

2. 人物像と言葉づかいについての意識

ここでは、2004年7月に日韓両国で行われた「役割語についての意識調査」の内容から、韓国人日本語学習者に関連する調査結果のみを取りあげる¹。インフォーマントは、日本語母語話者53名、韓国人日本語学習者21名であり、韓国人日本語学習者においては、日本滞在経験が2年以上で日本語能力試験1級以上の日本語力を持つ人に限定した。

本調査では、人物像とその人物像から思い浮かべる言葉づかいの間での、日本語母語話者と韓国人日本語学習者の意識の差を調べるために、漫画の登場人物のイラスト10種と、それらの登場人物が漫画の中で用いている言葉づかいの例20文を調査内容として使用した。調査票には人物イラストと言葉づかいをランダムに配置し、各人物イラストにふさわしいと思う言葉づかいを2文ずつ選んでもらった。

図1は、もともと漫画の中で用いられた言葉づかいに、日本語母語話者と韓国人日本語学習者の回答を照らし合わせ、人物イラスト別の正解率を割り出した結果である。正解率の全体平均は、日本語母語話者 (JJ) が70.2%、韓国人日本語学習者 (KJ) が46.5%で、日本語能力試験1級以上の上級の学習者であっても、役割語についての知識レベルにおいては日本語母語話者との間にかなりの隔りがあることがわかる。

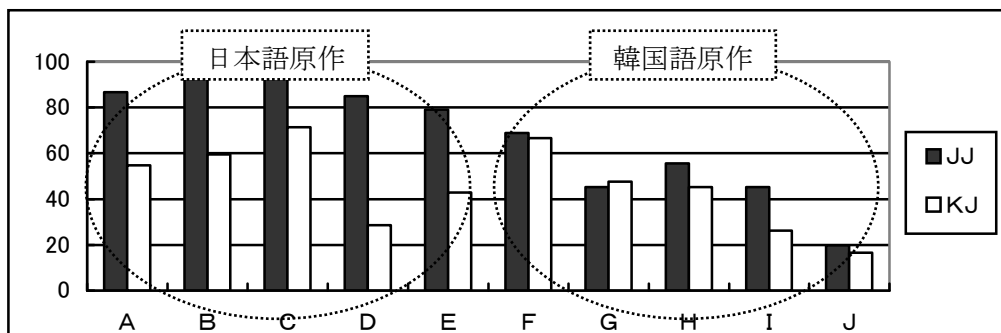




図1 人物像に対する言葉づかひの正解率

特徴的なのは、JJの平均正解率が日本語原作(89.6%)と韓国語原作からの訳本(47%)との間に明確な差が見られるのに対し、KJの平均正解率は日本語原作51.4%、韓国語原作からの訳本40.5%で、JJほどの差は見られない点である。

ここで、日本語原作からのイラストA~Eの結果をより細かく見てみると、両者の正解率にもっとも差がない項目は「C. 年寄りの博士(正解率差27.7%)」で、もっとも差がある項目は「D. インテリ医者(正解率差56.3%)」である。表1に内容の詳細を示す。

表1 調査で使用した人物像と言葉づかひ(C・D)

人物像 (イラスト)	言葉づかひ
	日本語版
C. 年寄りの博士 	<ul style="list-style-type: none"> 昔からそうじゃの一... 辛い事もあるじゃろうが、もう少しの辛抱じゃ!
D. インテリ医者 	<ul style="list-style-type: none"> どうしますかな? もう一度よくお考え下さい

これらの結果から、KJは文全体のニュアンスから人物像を読み取るより、「じゃの一、じゃろう、じゃ」など、何か特徴的な言語形式をマーカーとして役割語を理解しようとする傾向が強いのではないかと予想される。

3. 日本語の方言についての意識

2007年6月に本務校の韓国人留学生11名を対象に日本の方言についての意識調査を行った。この調査は、すでに2005年3月に韓国、2006年11月に日本で行われた方言意識調査の追加調査と、今後の役割語習得研究のための試験的調査という2つの意味があると位置づけられる。今回の調査はその結果の信頼度からいうと、局地的な小規模の調査であることやインフォーマントの日本語力・在日期間等にバラツキがある点など問題も多く含んでいる。しなしながら、今回あえてこの調査結果を分析・考察することで、今後の韓国人日本語学習者の役割語研究の調査方法や方向性などへのヒントにしたいと考える。

3. 1 日本の方言に対する知識

調査対象とした方言区画は、東京、関東、北海道、東北、中部、近畿、中・四国、九州の8地域である。まず、韓国人日本語学習者が日本の方言形式をどの程度正しく認知しているかを調べるため、8方言によって書かれた文を提示し、当てはまると思われる地域名を当ててもらった調査を行った。その結果を、2006年に行われた日本語母語話者に対する同じ内容の調査結果と照らし合わせたのが図2である。

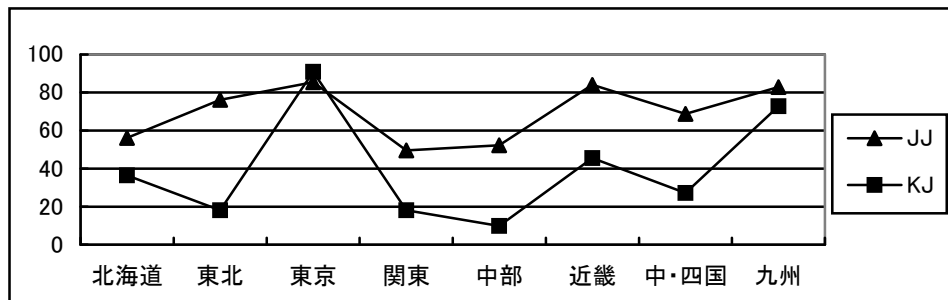


図2 日本の方言に対する正解率

正答率の全体平均は、日本語母語話者 (JJ) の方で 69%、韓国人日本語学習者 (KJ) の方で 40% であり、日本語母語話者の方で著しく高いことがわかる²。KJ の特徴として、東京、九州など正解率の高い項目と東北、中部など正解率の低い項目の差が激しい点をあげることができる。これには、日本語学習書での言語形式が東京方言にもっとも近いという実状と、今回の調査地域が九州だったことが原因として働いていると考えられる。

ちなみに、今回協力してくれたインフォーマント 11 名のうち 8 名は日本語能力試験 1 級合格者で、他の 3 名は 2～3 級レベルと判定できるのだが、両者間の正解率に顕著な差は見られず、今回の調査結果に限って言えば、日本語学習者の日本語力が方言知識にそのまま直結するとは言いがたい。さらに、在日期間と関連しては、在日 3 ヶ月の人が 5 名、1～3 年の方が 6 名だが、この両者間にも正解率にそれほど大きな差は認められない。もちろん、日本語力、在日期間による方言知識の違いをもっと明確に判断するためには、調査人数や調査地域における信頼度を高めた上で調査の幅をも広げるなどして、さらなる考察を進めていく必要がある。

3. 2 日本方言と韓国方言の類似性についての意識

韓国人日本語学習者のみに、日本の特定の方言に似ていると思う韓国の方言を聞いた。本項目は回答自由としたが、東京と近畿方言においては無回答が一人もおらず、これらの方言に対する関心が高いことを示している。調査の結果から、もっとも回答が多かったペアから順番に並べたのが表 2 である。

選んだ理由のコメントを見ると、1 位の東京方言とソウル京畿方言については「同じく首都圏で標準語地域」という意識が強かったり、2 位の琉球方言と済州方言は「両方とも南端の島」という地理的な特徴が意識に反映されたりするなど、言語そのものの共通性より地域環境的な共通要素をもとに類似性を判断する傾向が強いことがわかる。

表2 日本方言と韓国方言に対する類似意識

順位	似ていると感じる方言	回答数
	日本 / 韓国	
1	東京 / ソウル京畿	11
2	琉球 / 済州	8
3	九州 / 慶尚	5
3	近畿 / 全羅	5
5	近畿 / 慶尚	4

ちなみに、今回協力してくれたインフォーマントの出身地は、ソウル京畿1名、全羅5名、慶尚5名である。本調査では、3位の近畿・全羅方言が似ていると答えた5人中4人が全羅出身で、5位の近畿・慶尚方言が似ていると答えた4人中3人が慶尚出身という偏りが見られるなど、インフォーマントの内省と日本の方言への意識の関連性を示唆するところもあったが、この判断についてもさらなる調査が必要であろう。

4. おわりに

これまでの考察をまとめると、次の3点がいえる。

- (1) 韓国人日本語学習者は、文末語尾などの表面化した言語形式をマーカーとして役割語を理解しようとする。
- (2) 韓国人日本語学習者の日本の方言イメージには、地域的な環境が類似する韓国の方言イメージが影響している。
- (3) 日本語力と日本の方言への知識は、必ずしも比例するものではない。

今回の調査は試験的なものではあったものの、これらの結果が今後の日本語教育に示唆する点は少なくない。それは、役割語を上手に理解し使い分ける能力が、近年ますますその重要性が強調されている社会言語能力に密接に関わっているからである。より効果的な日本語コミュニケーションのために、異文化間の誤解をできるだけ少なくする努力が必要であり、その流れの中で、役割語に焦点を当てた日本語教育は注目に値する。今後、さらに本研究を深めていくことで、日本語学習者の習得研究や方言教育などに、色んなヒントを与えることができると考える。

参考文献

- 金水敏 (2003) 『もっと知りたい日本語 ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店
 鄭惠先 (2007) 「日韓対照役割語研究—その可能性を探る—」 金水敏 (編) 『役割語研究の地平』 くろしお出版 (印刷中)

¹ 2004年7月に実施した「役割語についての意識調査」の全体的な結果については、鄭惠先(2007)に委ねる。

² KJへ質問票には、たとえば「秋田・青森(東北方言)」のように、8方言名に加えて具体的な地域名を併記することで、日本方言への認識不足のハンディキャップを補うことにした。もしこのような操作がなかったとすれば、JJとKJの正解率の差はもっと広がったであろう。